

【図書紹介】『ベルクソン読本』 久米博、 中田光雄、安孫子信編 法政大学出版局 二 〇〇六年

大東, 俊一 / Daito, Shunichi

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

79

(発行年 / Year)

2008-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007962>

【図書紹介】

『ベルクソン読本』

久米博 中田光雄 安孫子信編 法政大学出版局 二〇〇六年

大東 俊一

ベルクソンは二〇世紀の初頭において、旧来の哲学を再検討しつつ根本的な批判を繰り広げ、サルトル、メルローポンティ、ドゥルーズをはじめとした多くの哲学者に多大な影響を与えた。『ベルクソン読本』はそのベルクソンの哲学を再検討し、現代的意義を探ろうとする労作である。

「第一部 ベルクソンと現代」では編者それぞれの立場から、現代においてベルクソン哲学を再検討することの意義が開陳される。続く「第二部 ベルクソン哲学の諸問題」では、「記憶」、「知覚」、「時間」、「生命」などといった概念をはじめとして、ベルクソン哲学の本質的部分についての紹介と検討が行われる。「第三部 ベルクソンと哲学史」ではプロティノス、キリスト教神秘主義、十七世紀の哲学（デカルト、スピノザ、ライブニッツ）、十八世紀の哲学（ルソー、カント）、十九世紀の哲学（フランス唯心論、ドイツ観念論、実証主義）が取り上げられる。さらに「第四部 ベルクソンと現代思想」では、ベルクソンから何らかの影響を受けた現代の思想家を中心に、サルトル、メルローポンティ、フッサール、ハイデガー、レヴィナス、デリダ、ドゥルーズといった哲学者達や小林秀雄、そして、現代科

学におけるベルクソンの生命哲学の意義が俎上にあがる。「ベルクソン著作解題・研究紹介」においては、ベルクソンの主要な著作の改題、研究に資する書籍の紹介、そして、ベルクソン研究の世界的動向が紹介されている。

このようによく目配りされた構成を有し、多角的にベルクソン哲学を紹介・検討しようとするこの『ベルクソン読本』は、まさにベルクソン哲学への包括的なガイドブックである。これまでに国内で発刊されたベルクソン関係書籍の中に類書はなく、日本におけるベルクソン研究の到達点を示す記念碑的な著作と言ってもよいであろう。編者のひとりである中田光雄氏は「ベルクソン・ルネサンス」という言葉によつて、これまでいささか凋落傾向にあったベルクソン哲学が現代において再評価されている状況を表現しているが、本書がそういった流れの中でベルクソン研究に従事する比較的若い研究者達の手によつて世に送り出されたことの意義は大きい。

最後に、些細なことであるが、上記のような本書の性格からすると、読者として想定される入門者向けに、ベルクソンの簡略な年譜ぐらいは掲載してもよかったのではないだろうか。